



西  
倍  
一  
覽

完

7  
拜

130





わさうらたて無き世の人あはれ  
彼の意もあはれなきよのひまは  
のまの人の情風をうらむるもあは  
れなれ故にそのまのまのまのまの  
彼等の情風をうらむるもあはれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ

あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ  
あはれなれ又もあはれなれ



往來の事

替袴の事

元日の事

手紙の事

入道入道い合はせ  
良村の事

目録

西俗一覽

身体衣服の事

黒澤孫四郎 譯

身み一い全ぜん身みと奇き廉れんめめ髪かみ髻むす成なりううななをを付け  
黒くろと白しろくく思おもつつ子こ業わざの外ほか手て及およびび子このの礼れいと汚けぬぬ  
振ふるるる意い紙し付けべべ性うまれつき素す煙えん草そうをを好このむむ人ひとをを身み体てい  
汚けららとと別わかけけてて身み体ていと清きよ浄じやうよよらら事ことと  
心こころ無なきき心こころ無なきき  
形かたち空うつらままかかままいいざざららりり形かたちつつづづままのの甚しくく是こゝろ衣い服ふくふふ  
ののぬぬいいざざららりり又また花はなややううよよささららもも皆みなとと後あとししううらら後あと

上は着帽子ふの良品は其品は好は任すや之  
 ども艶たるもこれ衣履と用はるはあまり流石なる  
 むべうは又全く流石なる情のゆるしうは良貝河  
 襦袢をさふ新くは白を拭き袋帯は當をさ  
 帯はくは正しく襟紐と結ぶは玉石の飾り珠と  
 ちまきとまきと但は針或は金紐指環、鎖を  
 こまきと用ゆるも

女の男とちがひ衣履の色は良飾りたるはよるもよ  
 然し粹たる女の艶たるを好まざる飾りたるはよるも  
 唯依りのたるはよるも

衣裳は便貴く其艶たるは用ゆるもよるもよ  
 く飾りたるは色のよるもよるもよるもよるもよ  
 玉石と飾りたるは希はなり信令飾りたるも金珊瑚  
 玉珠等たるは金割るも外はありあるも玉石と飾り  
 たるは和式衣履の時及は和風の會許りあるは

身持の事

諸人小やうくよるもよるもよるもよるもよるもよ  
 するもよるもよるもよるもよるもよるもよるもよ  
 たりは官府の務め向ふは正しくよるもよるもよるも  
 するもよるもよるもよるもよるもよるもよるもよ

及び友府の勢むる者、形更之と申急べし。群り成  
つるも、こゝろをわたり、事やましく、それをも人々怒りし  
む。その形、一人は悪むもや、さうして不興なる類  
を、と以て、すまざる人を辱しむるは、

人と識人との引合さま

人を引合はすま、いふは、必成用也。一誠ぶく、双方の了  
智成す、さうして、引合さま、一まふ、いふ人、本、ト、安、ト、  
中、頃、不、和、を、絶、交、さ、さ、さ、の、形、さ、め、も、あ、ら、じ、或、は、短、偽  
ま、介、の、為、ま、ふ、互、は、か、己、と、た、る、を、好、ま、さ、る、の、形、ま、あ、ら、じ  
其、外、種、の、對、面、と、好、ま、さ、る、道、程、も、あ、ら、じ、れ、は、幼、無、さ、る、人、と

引合さまの形さま

朋友のあはれ、さうして、初、對、面、あ、ら、じ、形、か、致、思、ふ、人、の、出、ま、さ、る  
ま、一、何、り、い、人、我、と、初、と、ふ、た、る、の、り、と、欲、ま、さ、れ、ば、ま、朋、友、い、ま、と  
我、と、い、人、の、引、合、は、ま、だ、と、い、ふ、ま、此、人、善、良、た、る、者、好、ま、さ、る  
る、形、初、依、り、ま、い、人、の、仲、間、中、ふ、あ、る、ま、さ、る、れ、は、先、方、の  
禮、と、違、ま、さ、る、也、

朋友と回さるる時、我識人のまふ、毎ま、ま、朋友とい人  
引合さま、さうして、

人と引を合さま、男と婦人の群、一、回、を、ま、さ、る、婦、人、を  
男の一方、さうして、又、依、を、ま、さ、る、者、貴、ま、さ、る、の

人の方へ回るまづ一尚向ふ處方の姓名をいひ程の  
りふおのせしとす毎し  
男と婦人小童面をむらふ縁どめ婦人の事知し  
つらふあしれが等くづら此婦人の事以て其人の  
性質りふ朋友風信とせしむす一交知をふたり  
きり人を絶交するふいせれをれすと記されば  
朋友と同道し一人の家へ行つて此をいふ事ある  
其上と人をつまやけり先方の悦ぶべしとせしむ  
まると形を子例に記し朋友とせしむりといふ一  
事よつては時を恐くは先方一家の我を親愛する心と

先入身し悦むべき事なり也  
知らざる人あり我ふれと存しよの時より禮と還す  
りより又主人小助けとあるより若し知らざる人  
容儀風信のよき人といふ思つ我を悦ばんや欲を  
いふとあるより然し互に悦ぶるよあはれが其  
後をふとて挨拶するよ及ぶ  
今を記し人あり人絶交するよ甚巧なりと一  
より礼儀を増しし付さ合ふより最巧なる絶交の位  
たるし一礼儀を能はざる時をよ強き位方とあるは  
知らざる人よ出逢ふ時禮をせざる妙と一此れハ強き位方の時乃

西行集  
其是土載



外固く情むべし  
 我や交りしよしと好む人の外決しし程小交りしを  
 亦むすべし其れ無しと滑るる朋友ハ業も利益もせり  
 ぬのちも此れありし方より詳しきる時ち寧ろし  
 のつらる者なり

添書と以て人と引合さる

遠國より親く朋友と行く者も住るる識人の面する  
 だけ者も添書と与ふべし官務ある人は我朋友と  
 引合すも或る唯信事と扱ひ行ひしむるも之を我が  
 識人より引合ひしむるは先方我と回向の住居しむる添書と

以て美面をむらりしり添書ハ封さばよ南人  
 後しそ南人封さる半と欲する時封と遣はし  
 ○知こ小なむらりしり添書と無あるは先方も我ら  
 知る者ありし添書と与ふる者も亦先方のまゝ  
 無る性質の者なるべし

添書と与ひし者之と先方指りては又持行く  
 るも南人の好むる時合ふべし先方の身  
 及び文章なる朋友より封面と形をさる半あり  
 其外種々先方より封面と形好まざる道理もある  
 添書と取棄るる敢て双方へ先礼なる半あり

○流書と云ふは自ら書く者あり自ら書かざれば流書と云ふ方より  
 持行の時先方の之を讀む間先方の前よりお待たせし  
 不他法ありて思つ先方と煩ひて之を承僕不命  
 此流書と先方の名宛を記し自ら自身の手札と流書と  
 別とす一は只用向のめよりひら流書をなれば用向  
 礼式と專にあらずる流書は自ら書く之を持行す  
 我流書と流書の時亦流書と速く之を持來する人の方へ  
 手札を並べし一紙とされを主人に流書とあはしたる  
 人へも先札たるべし一紙一紙に對面せんと思ひ思つ  
 之暇あれば其人を流書とす一先方とては流書我方へ

手札と書きて或は我と訪問して以て我の訪問乃礼を  
 還すべし一○此上其人と文とんと款を再び先方と訪問  
 する礼或は會合ふ振る或は我が方の集會ふ流書に於  
 商人の會合より先方の情を承りて礼とすべし一先方  
 ありては流書の礼儀を承流書も辨るるも自身の好む  
 其時の款合ふるべし一之を承諾する時我と流書と  
 文とんとあるなり又之を辨るるも家業とて先礼  
 たるありしなり一やうとて我と文ととの意あり  
 事と知りし  
 婦人は對面せしむる為に人に流書と与ふるよハ

其婦人引合さふ相悪の人物して先方のこまよ  
り申しぬ向ちうらへぬさきび之ふ添書とふらうら  
○添書と添書ら婦人之人と持来ぬるも女あるまばり速  
そ女を訪官まへし一あり男形まばり方へ半紙を  
送くく某日よあると旨トをすし一むき男より對  
面と好まされけし手紙を贈る事一あり

人を訪ふ事

朝ヤ人を訪ふは洒落なる者ハハ唯まこれと言圖は  
置くのこころは先方小對面まらりあり一ありけし時  
先方小對面まれば朝の仕事ハ坊げハあるまきさ

ゆ名長居とをすべし此「二」或ハ十「二」より二十  
「二」の時間と訪うとす○朝ヤ人を訪ふ時刻ハ先方の家  
風よるまへし一あり一あり十時ある人を訪ふは失礼なり  
弟十一時より弟二時或ハ三時と通例の時刻とをむ  
先方直食の子に家なれを食後一時迄と見計り行く  
あり先方の重會中あると時刻は行くより大いよ  
礼と志らばとす○人の家を訪ハ先方の夫婦は對面ま  
飲まらぬ細君の者やいやとあり一あり細君家よ  
あり此或ハ對面まらりありわらばとをこれと志し一  
○朝ヤ人を訪ふ時ハ玄圖ハ帽子或ハ傘と持たるま

中へ通るべし。如けするは我長居するし。如きとす  
 なるは活一の長くするべし。時ハ中へ通るおふ杖笠  
 合羽の事。昔は帽子もと言は果は。一  
 我が訪ひたる女他行。まを支度する時。又ハ言入。女せん中  
 欲する時。お外き。用事ありげ。多る時。可成。支。速。ま  
 暇乞。ま。一。然。一。名。方。う。く。い。客。ま。着。一。迷。惑。の。極。ま。と  
 兄。ま。う。ら。ぬ

訪問を受けたる女可成。い。家。僕。ま。用。事。ま。言。付。け。ま。お  
 家。半。不。拍。り。う。う。う。と。客。あ。る。時。ま。世。活。中。う。う。う。に  
 如。ら。う。く。何。の。極。ま。一。○。客。ゆ。る。時。あ。お。不。客。あ。れ。を

自身あし。送るべし。に。家。僕。ま。命。ト。入。口。ま。ぐ。送。ら。し  
 む。一。外。ま。客。あ。る。時。ハ。自。身。を。送。ら。し。一。婦。人。の。客  
 あ。し。と。同。極。ま。り

如分。集。會。ま。る。ま。む。女。ま。者。汗。り。た。ま。る。一。夜。中。八。時  
 一。前。ま。會。す。ま。る。し。り。如。く。十。時。或。十。一。時。ま。一。教。ま。と  
 一。一。然。一。是。規。則。ハ。家。の。風。ま。は。は。く。お。連。あ。り  
 我。う。訪。ふ。と。悦。ま。ば。ら。ま。る。一。ま。ま。決。ま。て。行。く。べ。し。以。用。半  
 ち。は。ま。招。く。多。敷。ま。よ。行。く。べ。し。以。親。一。う。う。ま。る。家。法  
 活。ふ。べ。し。に。我。ま。人。を。活。ふ。時。遠。方。の。人。或。ハ。お。約。束。或。ハ  
 用。事。一。あ。る。客。あ。る。時。ハ。早。く。暇。乞。ま。と。一

華盛頓、その男の付法を、はき来へあ、りきり  
むの肉男ハ用事、ある法、以、く男の、ま、り、時を  
ま、り、外へ出、り、と、は、れ、は、り、此、風、俗、他、若、都  
府、も、や、ら、ん、が、お、り、つ、り、を、婦、人、ハ、此、常、の、町、り  
あ、り、れ、を、夜、ハ、男、の、付、法、を、く、り、は、き、来、小  
出、づ、を、り、り、次

夜分の集會の事

此會と催すよ、み、耐、と、最、相、あ、る、時、催、す、○、ま、の  
會、ふ、招、く、人、の、こ、り、に、あ、り、り、前、二、日、より、十、日、迄、の、日、に  
板、行、の、書、付、成、り、あ、り、り、書、付、と、細、君、より、き、り、

一、招、り、り、り、人、ハ、子、を、り、と、送、り、り、あ、り、り、  
一、辭、り、と、な、り、り、

細君第九時より、十時、の、間、ハ、集、會、に、  
一、一、客、ハ、九、時、の、時、十、時、の、間、ハ、集、會、に、  
細君ハ集會の、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
あ、り、り、の、來、ぬ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
○、客、來、り、れ、を、小、性、き、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
ま、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
且、つ、女、客、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
一、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



那屋に光を燈しおぼふ花多と飾りて一具の  
女共の爲る様子を十分は備へ置くべし  
湯に皮膚の臭気は集會の爲る男女とも夕飯の時乃  
外おれををづまづり  
并十二時或は其より後迄は通くお南の時刻迄は人  
より先より帰る人々不可来よと静くせよとせよと  
人御共お暇乞と存候べしとせよとせよと法人と妨げ  
ぬらんが爲なり

會合の事

會合ふ於ても人数の多しり者ごとを以ては

叶ひらる者のを撰びて男女二人を以てを志むる我  
びくハ人共十二人と程もを人数とす○客は招くは  
當日より前二日より十日との間は手紙を贈りてむも  
當日やい多きを贈る日との男も二日れ者余あきを用  
言も十分は整ふごとを以て此位の日迄を最も  
とす但し手紙の細君の名を遺し先方より毛  
子く細君名宛の返事と以て承知又ハ様子を尺紙  
よす○招くは人承知のし申事か来し来し  
不能時より速に報と細君よ告知すべし是も細君  
を以て主人の代り別々相商の者を招くを得せし

むるるなり○會食の時刻は招き状の内は述べた通り招  
うねる人々別居と不差を云ふ一會食の時刻は宵  
時より第七時迄のお遊あり

客ハ生教ニ集り會食而ハ召さる時男ハ各婦人の  
後をひく會食所は行く一會食而下生教たる  
時女と聲の方ふまゝして階下なり一會食而  
目ト持し女と女と友の方ふまゝむべし主人一人乃  
女客と振之を後ひく諸人ふ先づ座し細君ハ主人  
の政より人の男客ととりまゝ行く

細君ハ卓子此上坐せし固と知すも例は坐し

二人の男客之と手傳之し主人ハ卓子の下生よ控て  
二人の女客のるよ坐成とむるなり又主人細君と卓子の  
中央より向ひ合し坐せし客も一り主人并よ細君の坐  
せし側と成表よ席とす

弟つふス吸和の形と出せ但しあまり熱くすまうは決是事ハ  
決しと替りともふべし此之と合しるは他の客を待と  
むるを候てなり七の候より静よあふべしスープと好  
まざれを散て之と合しる及ぶ也○規則正しくすれば是ハ  
魚類と出せ細の魚力ヒスナイフを用ひ細の肉叉子フォークと左手も持てる  
麵色と成ぬる合しるは魚と合しるは小刀の入り

土藏



大抵を成りし固又をを用ゆるなり○其法を小肉類を類  
 して小持おす○固の桐あて或は蒸汁等を飲まらん人何  
 まを之と云ふも肉のふそくを以て其血の増えたる  
 久く

ナフキン布中の如き物を用ゆるは法なり是は合と始むる時膝の  
 上より廣く○半か程湯をのまらん「ピンゲル、ガラツ」指と洗ふ  
 を合後其果を共におす○法人ナフキンの隅をけ其の  
 中より湿り一袋拭ひ且つ指と洗ひナフキンより拭ふ  
 毎一然し卓子小向くハを洗ふハ其礼之又唾、ツバ吐逆  
 其外如く法人の如地と悪くきむと云ふハ固く

情く之をなすべし

食物を決して庖丁を以て潔くするは固又を以て  
 不足する時ハ麩色と云く之を助ぐべし又ハ固又子乃  
 代りし用魚○嘘む小煮法をなすべし「スー」上見を然  
 しく吸ふ物を以て家僕数人と卓子小侍を以て其者  
 其を籠る白きナフキン上見と云く其の血を扱ふむべし  
 或ハ家僕を奇癖する白兒を合と云く之を為さしめ  
 ナフキンを以てしるなりナフキンをを用ゆる方より  
 かしこ○料理ありき物何りとも又家僕の過ちありを  
 情く若くするは誠實を示すべし又其ふ二言かたを

ありてくつは○肉と分つよ先つ婦人よおまゝー○旅人の  
 合言と始むるを待つよ及むは○酒の魚鮓と合言する前よ  
 飲むはくは○婦人卓子より西く時男トテ其卓子を  
 せぬまゝく婦人の會合おとさぬ成待つ御しー○コーヒの  
 會合前よりく客よ勤むしうあり又いせ愛あしく勤むる  
 事ありし時の撫子成は主人の好まはば  
 華盛頓<sup>ワシントン</sup>は於てハ客と招く馳せせんと飲する者を  
 佛郎西<sup>フランス</sup>の料理人よ之を命さるし流石すは料理人ハ  
 思ふよ卓子よ侍まぶと僕と其方より出さ成以て其後  
 利なり主人ハ唯卓子おとすは備ふと道具をハ料理

人の於ける物を備ふるのよなれば僕稍貴しと魚庄記  
 けり少なるにー

淡話の事

衆人の中あて蕨海と名まぶるは話し之をあるは  
 物靜ふをすべし我白色の説ハ人然しく之を事時ハ  
 之よ勝せんより寧ろ此ハ蕨海と止むべし若し我ハ  
 出さるるより自色の説よあはは先賢の説をわく之を  
 事ハ時ハ其澄按と出して蕨海するもよし○慎く  
 憤怒のちを顯はまぶるは衆中ハ容易に怒る者ハ皆

忍まらざる之と遠くふらふべし。○人我は清く時を假令  
我が拘りたる事なりとも悔く之と聴くべし。又人我  
咄しと切らざるにまじく之を察の途切らばはつる  
人の世しと切らざる先礼なるべし。  
人を浅くするは然中しき事なり居る奴者之と識る事  
なるれ人の過らざる不辨むべし。又人我の小人  
あつたまを人の色ちとゆくを好まば才徳ある人  
人の世と譽る者之悪く之と遠けん事と勢む又人乃  
我は清まるべき意なる物徳及び人の悪く之を察を再び人  
不浄なるべし。正直なる君子は臨んぢざるべし。○人の

不具或人のふは合とめりく笑ひ樂むる仁し  
ふ意とくまふ。然し善ふなるる滑稽ハ人せよ  
由あつとゆく之とやもりし事あるとふらぬ。又人  
の礼儀ある人の席ふけく之と用ゆる事。衆人之  
知らざる事と志するありとをまべし。又人よといひ  
の介我があつたりし事と云ふは之と又生れは  
固く之を察を用ゆる時、博學なる者又笑つる。又  
又外國の言葉も先方の之と志する。又人我の  
ごまはるる事。又人我の事。務をなれ事。件并よ人の公勢ふ  
常ふ世間の事。務をなれ事。件并よ人の公勢ふ

りくろの心を海するより甚しと云むまは務よりハ  
 らざるのハ海まざるハ○亦事 兼ハ我子或ハ我婢  
 僕のハ最心安さ者の介多々あるハ且つ之を誤矣  
 まるしハ決して海す事一なり

固く情しんて詐るといふハ我が言ハたるべきを事  
 以出するハ此ハ一之と以おはす時ハ心小くあつて  
 かしくもかざる事ハ一之と云ふハ小人ハ不ぬそや褒賞する  
 ふ時ハ幾件来しと云ふ之を信じて害あるも益あり  
 くのハ一之直なる賢者の歎美するハ亦ハ天下人の  
 一之やまるといふハ一之私乃海あり故ハ何事といふ

と云賢者よたしハ情く作り飾りたりなり  
 年輩の我よ執るる者或ハ藝能官位の我よ長し  
 する者の物倍り情く聴ゆすハ一 粟米利加の倍お強  
 といふハ我の事と考る豈汝と異らんやと長者は長  
 のことハ一之を思はらくハ賢者のよりとせざる事ハ一  
 ○少年の事ハ訓まざる者ハ別しハ常に愛ふハ只  
 家くともいふや彼を愛ふハ之をいふやと云思すハ  
 天下の事物より盡く之を知りしんや且つ然るを  
 必ぞ之を知らばと云ふもあはれあり一我説と云と必ず  
 づと時ハ唯我が説ハいしと云ふハ一教く如きハ

人の勤るまじくさる確海なりといふべし

往來の事

往來しゆく衣後と申しゆくすまふらりしゆす初よ衣  
腹ハ衣と申す十分ふ正くまじし。○静ふ程くおむし  
あまふしゆくすまふらりしゆ大なるて申し。又大なるて申す  
づしゆ終る付ハ回舎人のゆきと免まじ

識人よ何ふ時ハお富の挨拶と申すゆくす今挨拶と申す  
人よ又再三と申すゆきしゆ相交ると挨拶と申すふ及つて。○識れ  
ふ婦人よ申すふ時ハ申んて帽子と頭ふ小巻と申す。○婦人を  
連ねらる家識人よ申すふ時ハ帽子と頭ふ申す婦人ハ第一

この礼をとりし時先の累も帽子と申すゆく我よ返れす  
申し。但し我婦人と同名と申す時ハ同極なり

婦人よ礼と申すもよ我れより先きふ申す出まじゆく  
時時ちも袋と申す。むふ初舎るまじこれと申す  
ゆきもす

婦人よ同道と申す時ハ我ハ馬車の通りまらるるの方よ  
まじゆき。○は申すも婦人成ハ婦人と同名と申す男に  
あふ時ハ道と申す。ゆき

誓禮の事

誓禮の時ハ夫婦の子れと夫婦の識る人よ婚らげゆ

唯聴く始の如く祝しくせんやと形ふのまことと願ふべし  
 其もれの女の激る人の方へは女は父母より嫁り婿の身  
 しくまゝ識人は賜ふなり又夫婦二枚のふれを用ひん  
 して夫婦の右と一枚のふれを記するなり也あり何事  
 ありとも事あるに對して袋に入るべし一ふれと白と打  
 細しく結び付るなり今法行するなり○此もれと清き  
 なる者ハ可成丈迷ふ夫婦の修治もふれと云ふも其  
 ふれと為るべし一夫婦もふれ又夫婦のふれと婚り且つ  
 某日ふれと云ふ有り遣ふべし  
 妻と婚りたる者右の如く二枚のふれと婚りしと云ふは

以ての如くむと山人へ付合ふなり一出席する時  
 挨拶するなり○妻を娶る朋友はれと行ふと教へ  
 之と婚る事ハ好むは福のなりと教へる朋友と云は  
 妻は人の人相高なる朋友ふあり者あり妻は  
 對面せしむるは相高なる者なりと云ふなり何れも且つ好む  
 婚姻しむる夫婦經濟の外のあり付合ふと云ふ  
 此の成好まばなりなりもあればなり

葬禮の事

我が死する者あり耐ハ忍ゆる招き状戒は板行の招  
 き状と朋友は招きしと云ふ金く之と婚りしと云ふは

を死しし者初其の死を葬送の日限と報告し朋友の  
 来るべき日を望む事一重例なり  
 葬送と送る者ハ車馬不装飾の洗燕愛問する事  
 務むべし一兒子と葬送は同道する事ハ一  
 一車一不飾也○死する者の近き朋友埋る場所  
 を送るべし一主祭の者ハ車馬又送る事又回勢  
 多き時ハ送力不足も可なり華盛頓の風俗ハ  
 白木の車馬一華礼と送る者ハ必ず郵介を之と  
 送り其先キハ葬がまゝ任す  
 親き朋友の外葬送の後一週日或ハ二週日の内一其

家と訪ふべし此は品と經る後ハ若く是るも或ハ  
 之を受けざるも亦象の徳有り○喪中ハ茶席ハ  
 装飾多々の飾りを用ふべし○喪中ハ急ぐ場と塗  
 る紙及び墨を封臘と申す人あり又之を用ひ  
 ざる者も有り

入書 元日の事

元日ハ盡我誠と人と決する 紐約都府の名の風俗多し  
 此風俗殆華盛頓より清都府を推し遷りたる  
 細君ハ急あり之客と侍ち客毎に飲料と飴先  
 互ハ新年と祝す客ハ長居を以て謝す此と並に

紙若密と受ふ事と好まざれば法あるを札を門  
戸小差中へ置く場所へ候令密紙受ふ事と云ふ  
事と云ふ唯手札と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
手紙の事

人書翰と用ざる者少くして紙と云ふ事と云ふ事  
等と云ふ所の者甚多し手紙の事と云ふ事と云ふ事  
恐むべしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
黒い紙を用ひ封じ袋は紙を用ひ封じと云ふ事  
見附ハ第一葉の表紙第一行の右に書くべし次ぎの

行の左ふせ *Dear Sir* 貴君の如き先方の名を稱と書

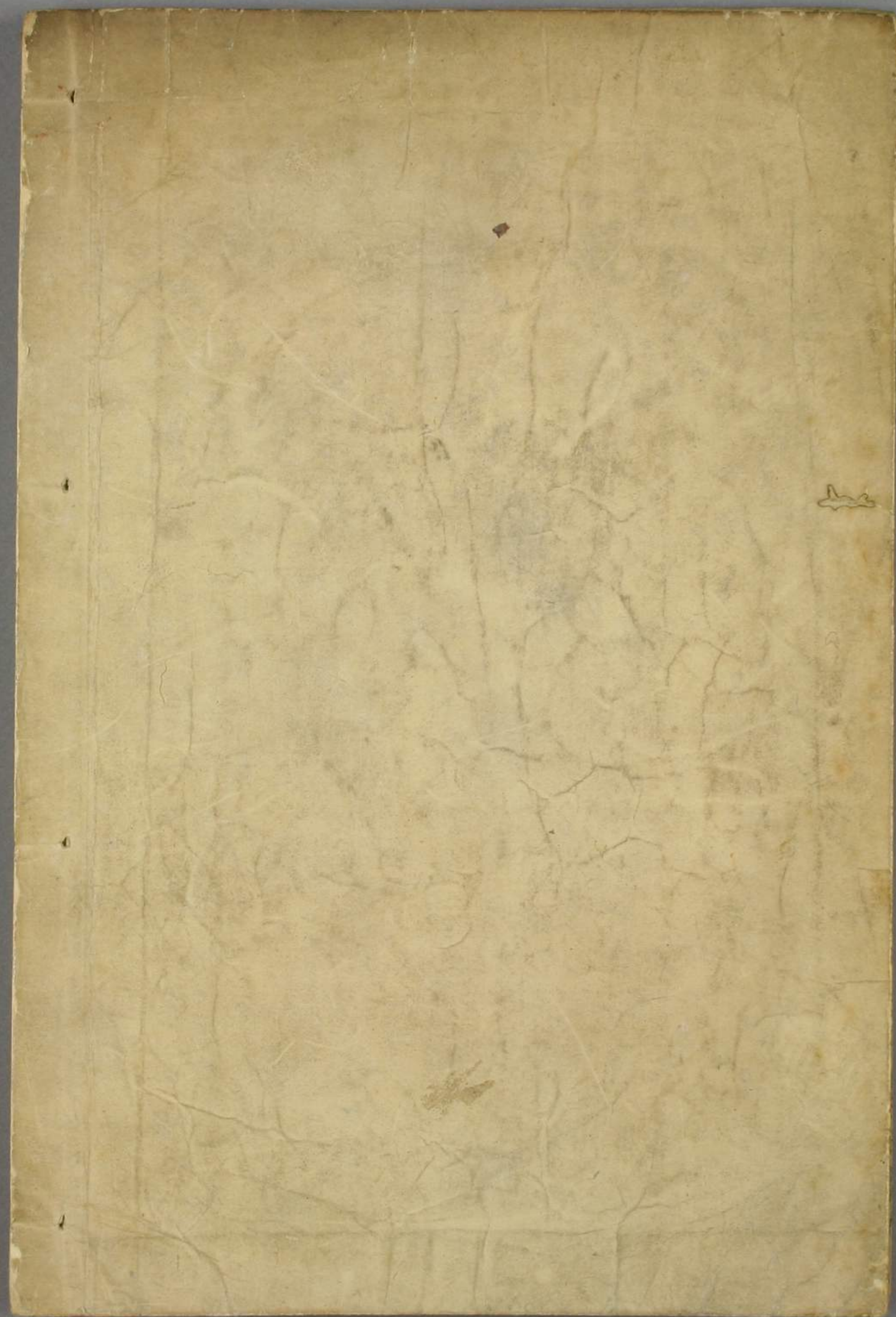
くべし音章の初め他の行より右ふせ書べし我名  
終りの行の次ふ右ふせ書く事毎行に次ふたふ  
うせ先方の姓名、尊号、位所と書くべし○手紙の  
相違形ふ疊々封じ袋に入し書たる紙を封じ先  
方の名を記し恐むべし先方の名宛居所等ハ封じ  
袋に書ふべき事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

婦人へ遣はす紙ハ場と金少く塗りたる赤紙  
ある白紙と用ひ候し○用事ハ手紙ハ子遠也  
事と云ふ事と云ふ事○人と招く事手紙と云ふ事と云ふ事



之也一但一以書付八板乃之也可也

西俗一覽終



明治己巳刊行

西俗一覽

其真社藏梓

